

Jesus as a healer of unsurpassable stature. Followers of mesmerism admired his ability to heal people by laying his hands upon them. Kardecism's healing method, of laying hands, was accepted by such group of people. Kardecism began to expand in the city of Salvador, in the state of Bahia, where the influence of African religious spirituality was strong. There was an attempt to gain official recognition from the government, but this was stopped by the archbishop of Salvador, who regarded Kardecism as a danger. The focus of activities then shifted to Rio Janeiro, and in 1873, the first Kardecism cooperative was established. Among the entries were the relatively wealthy and politically elites such as Free Masons and abolitionists.

Midori Horiuchi — Connecting “Life”: The Phenomenon of Life and Death (31) On “Life” [2]

Any "life" has difficulties in its attempt to live. An infant, who passed away by emaciation after being abandoned by his parents, was discovered after a few years. What can we make of this boy's "life," whose body was reduced to skeletal remains. Also, there are children born to live a short life or life with severe disabilities. There are others who languish with rare illnesses with no medical treatment in sight. However, in condition where family and friends and colleagues provide love and support, there is a way to live as a human being with human dignity.

Saburo Yagi — The Path Towards Normalization (29) Case of Denmark [1]

Parking spaces for those with disabilities can be found throughout the city of Copenhagen. On the streets, white lines demarcate the space, and a pictogram of the international symbol of the wheelchair is painted within the space. No colors are used on the road, and thus, it remains discreet. However, the wheelchair mark is painted in blue signs and can be seen by far away. The width of the parking space for those with disabilities is 3.5 meters wide: in comparison, general parking spaces are 2.5 meters wide. The area of the parking space is painted blue, and a white wheelchair mark is painted within this space. Unlike Japan, there are no fences or cones to prevent unlawful uses. There are also parking spaces for those with children, and these are painted yellow and are easily differentiated from spaces for people with disabilities.

Parking time is limited to three hours, and parking for a longer amount of time is not permitted. There is always a parking staff on watch.

Jiro Sawai — Great East Japan Earthquake and Religion (1) Great East Japan Earthquake: then and now

Given the background I have been given the opportunity to write about the Great East Japan Earthquake and religion. I have only lived in affected prefectures and have not conducted studies of the disaster areas nor can I disclose new studies or research results on this topic. However, what I can do is, relying upon various summaries published elsewhere, introduce the current conditions of disaster areas and the various projects that were undertaken. However, if such endeavor leads to opportunities to revisit the disaster and the current conditions of the afflicted areas and its people, then, I will be most fortunate. Since the disaster, many people have taken part in the recovery process. Among them, there were many people associated with religions. Also, religionists were in need in conditions where people were distraught with fear and plight. I will introduce several cases of activities by religious individuals.

新連載執筆のねらい

『教祖伝』探究

深谷 忠一

『稿本天理教教祖傳』は単なる教祖の伝記としてではなく、読む者が、それを自らの生活の中で実践する為に編纂されたものです。つまり、「ひながた」をたどるために読まれなければ、『御伝』が編纂された真の値打ちがでないのです。

しかるに、江戸末期から明治の時代を背景にした「ひながた」を、そのままの形で今の者がたどることは難しいことです。ですから、教祖の教えが、時代を超え国を超えて伸び広がるためには、教祖伝で語られている史実を出来るだけ客観的にとらえて、その史実の描き出している本質的なものを見とのおすことが不可欠になるのです。

明治の話は遠い過去のものになっている現代人、また、日本文化を背景にした話が伝わりにくい異文化圏の人たちにわかるように、言葉を紡いで教祖伝の本質の全てを書き記していくことは、とても筆者の力では及ばないところですが、せめて「歴史的記述的教祖伝の教理化」の素材くらいを提供できないものかと考えて、この連載を始めたいと思っている次第です。

東日本大震災と宗教

澤井 治郎

東日本大震災の発生から3年以上が経過した。当時、がれきの撤去にも2～3年かかる、復興にはもったかかるとい言葉聞き、途方もないと思う反面、まさかそれほどかかるものだろうかと半信半疑でもあった。その3年経過してしまった。岩手と宮城のがれきはほぼ撤去されたものの、福島は原発事故の影響で、がれきの撤去もあまり進んでいない。集団移転や公営住宅の建築は、まだ計画の1割ほどが完成したに過ぎず、事業計画にも地域で不満が募っている。

一方で、多くの人々の意識の上で、震災は終わったものになりつつあるということが、しばしば指摘されている。ここでは、震災を今も生きている人々について、また、震災そのものについて改めて考える機会になればとの思いを込めて、震災直後から様々な支援を展開してきた宗教者の取り組みをいくつか紹介していきたい。

連載執筆者の紹介

澤井 治郎 (さわい じろう)

天理大学人間学部宗教学科卒業後、東北大学大学院文学研究科博士前期課程、および後期課程修了、博士(文学)。同大学院専門研究員を経て、平成26年4月より天理大学附属おやさと研究所助教。専攻は宗教学、宗教思想史、天理教学。論文に「ティリッヒの宗教的象徴論にみる『究極的関心』」(『論集』第36号、2009年)、「ラインホルド・ニーバーにおける宗教理解の展開—『人格性』から『深みの次元』へ」(『文化』第74巻1・2号、2010年)、「ラインホルド・ニーバーとパウル・ティリッヒにおける宗教理解の枠組み」(『論集』第38号、2011年)など。

「おやさとふしん青年会ひのきしん隊第 806 回隊」に参加
深谷耕治

「おやさとふしん青年会ひのきしん隊」は、毎月 1 日～ 24 日を隊期として、青年会員が第百母屋で合宿し、親里でのひのきしんに汗を流す場である。特に、今年は当隊結成 60 周年という記念の年であり、全国各地より大勢の青年会員が拳って入隊している。筆者も直属教会を同じくする者たちとこの 5 月に入隊させて頂いた。

青年会員は 16 歳から 40 歳までの男子を指し、学生会で活動する若い青年会員たちもこの節目の動きに乗り遅れないように『Happist』という学生会の機関誌の最新号で当隊を特集し、その様子を広く紹介している。当隊の理念や一日の流れなどの一般的な紹介は『Happist』やその他の記事に譲るとして、ここでは筆者の感想をメインに報告させて頂く。

筆者の参加は 4 回目となり、回を重ねるごとに当隊での生活や作業内容には慣れてくるが、班を同じくする約 20 名のメンバーは毎回変わるので班の雰囲気は回ごとに当然異なる。今回は筆者が所属するやまとよふき分会と、紀陽分会、奈良分会を一つの班として隊期を共にした。

さて、当隊では「教理の実践」が一つのテーマであるように思う。一般的に「実践」という言葉には、教えられたことをただ理解するだけでなく身に行うことが肝要だ、というメッセージが込められており、そこでは (1) 意味内容の理解、(2) 身体を通した具体化、という順番が前提となっている。しかし、当隊で学ぶことは、教えは必ずしもその順番で体得されるわけではないことだ。つまり、まず身に行う態度である。

たとえば、当隊では草引きの作業がある。天理教の教えに「草引きをしなさい」という教えはない。代わりに「ひのきしんしましょう」である。そこで当隊では、草引きの作業を「ひのきしん」として行う。その段階では「ひのきしん」という言葉の意味内容はそれほど明確ではない。しかし、それから後に自分が「欲を忘れて、ひのきしん」という教えに出会ったとき、五月の風を感じながら汗をにじませて黙々と草引きをしていた自分の「あのとき、の心境を振り返り、やはり「あれ、は「ひのきしん」であったと納得するのである。

筆者も、この度の入隊でこのような経験を何度となくして、天理教が少し分かった気がする。大勢の人に味わってもらいたい「あの、時間である。

「ようぼくの集い」講師としてヨーロッパ・アフリカ地域へ
森 洋明

教祖 130 年祭の「三年千日」の 2 年目となる本年、3 月から 6 月にかけて「ようぼくの集い」が日本だけでなく、海外でも開催された。私は、教会本部からフランス語での「ようぼくの集い」の講師として任命を受け、5 月 2 日から 21 日にかけて、ヨーロッパ・アフリカ地域を回った。担当した開催場所と参加人数は次の通りである。

3 日 (土) ボルドー教会 (フランス) 32 名

4 日 (日) 大ローマ布教所 (イタリア) 13 名
10 日 (土) ガリシア布教所 (スペイン) 7 名
11 日 (日) ヨーロッパ出張所 (フランス) 55 名
14 日 (水) ポワントノワール布教所 (コンゴ) 46 名
17 日 (土) コンゴブラザビル教会 (コンゴ) 94 名

上記以外に、スペイン・マドリード (6 日) でも「ようぼくの集い」に準ずる形で講話を行った。フランス語圏ではフランス語で講話をしたが、イタリアやスペインでは、日本語で講話をし、それを現地の教友が同時通訳する形で行われた。

同じヨーロッパと言っても、それぞれに社会背景や文化が違う上、拠点ごとに布教伝道の形態も異なっている。そこにアフリカ (コンゴ) を加えると、担当した地域全体における差はさらに大きなものとなる。そのような中で、例えば同じ内容のビデオでも、個人的な感想レベルの違いを考慮しても、その受け取り方や感じ方には地域差があるように感じられた。その地域差は講話の感想にも見受けられ、さらに加えるなら、この「ようぼくの集い」の開催そのものに対しても違いがあるように思われた。

「それぞれが定めたおたすけ活動を、土地所においてさらに推進することを誓い合うこと」が開催の目的である。私の講話でどれだけの成果があったのかは定かではないが、各拠点で布教伝道を展開されている方々を目の当たりに、私自身が多くの勇み心をいただくとともに、「天理異文化伝道」という研究課題にとっても多くのことを学んだ有意義な巡回であった。



ようぼくの集いを終えて (コンゴブラザビル教会)

台湾で日本語教育学の国際シンポジウムに参加

金子 昭

中国文化大学 (台湾台北市) の日本語文学系主催の国際シンポジウム「〈学際的複合領域研究〉としての日本語教育学」が 5 月 10 日に同大学にて開催され、台湾、日本、韓国から多数の研究者が参加した。午前には基調講演が行われ、半田淳子氏 (国際基督教大学) が「日本語教育における文学的教材の可能性」、また表世晩氏 (韓国・群山大校) が「植民地時代の日本文化と群山」と題して、それぞれ講演。午後は 3 つの会場に分かれ、日本語教育や日本文学、日本文化などさまざまなテーマで 27 の研究発表が行われた。私は、第 3 会場の第 2 セッションで座長を担当し、涂玉盞氏 (中国文化大学)、長谷美貴広氏 (南開科技大学)、中村威久水氏 (和洋女子大学) の発表の司会進行役を務めた。

今回の台湾出張では、このほかキリスト教神召会神愛教会及び台北市先住民ケア協会への訪問取材を行い、また天理教台湾